



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 96

Feb. 2025

目次

- 新会長あいさつ 2
- 新評議員あいさつ 2
- 新役員等一覧 3

- 諸報告
 - 2025 年度第 24 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）
受賞者の決定 4
 - 2025 年度第 19 回日本植物分類学会論文賞の決定 5
 - 2025 年度メール評議員会議事抄録 6
 - 2024 年度日本植物分類学会講演会の報告 7
 - 日本植物分類学会講演会に参加して 7
 - 第 40 回国際生物学賞記念シンポジウムの報告 9

- お知らせ
 - 2025 年度総会のお知らせと審議事項 10
 - 2024 年度事業報告（案） 10
 - 2025 年度事業計画（案） 14
 - 日本植物分類学会第 24 回高知大会実行委員会からのお知らせ . 17
 - 標本チーム，標本レスキューチーム，命名規約・タイプチームの発足 . 18

- 書評
 - Natural History – Development in Japan and Its Future . . 18

- 会員消息 19

新会長あいさつ

会長 永益 英敏（京都大学 総合博物館）

旧日本植物分類学会が植物分類地理学会と統合し、現在の日本植物分類学会となったのは2001年のことでした。学会統合のために奔走していたあの時から、あっという間に四半世紀も経ってしまったことに、あらためて驚いてしまいます。私は統合後の学会では評議員や編集委員長として学会の運営に携わったことはあっても、会長や庶務幹事、会計幹事として運営の責任を担うことはありませんでした。大学の定年まであと1年を残すばかりとなり、学会のことは若い世代にお任せして私自身はフェイドアウトしようと思っていたのですが、今回、会長として選出され、どうやら「もう一働きしろ」と会員の皆様から叱責されたような気分でおります。

この四半世紀のうちに、日本植物分類学会は歴代の会長のもと様々な事業を展開してきました。社会的な要請にも応えつつ、植物分類学の発展に貢献できる力をもった学会として発展してきたと思います。レベルの高い英文誌をめざし、和文誌の発行を維持しつつ、いくつもの各種委員会が組織され、たくさんの会員が協力して問題の解決に取り組んできたのです。

しかし、世の中はどんどんと変化していきます。日本植物分類学会が植物分類学の発展に寄与できる学会であり続けるためには、常に革新の努力を怠ることはできません。インターネットの発展により世界的な情報共有の速度はすさまじいものとなり、オープンサイエンスとしての学術雑誌のあり方もそれに合わせて急速に変わりつつあります。また、遅れていると指摘のある標本情報等の発信についても学会として努力するのを感じます。海外調査や標本の通関にかかる規制もどんどん厳しくなり、情報の更新と共有のためには関連する学会との連携による対応が求められます。

学会の運営という点からは、昨今の物価高・人件費の高騰による影響が懸念されます。現在のところ、会計の状況はただちに会費の値上げには至らないようにみえますが、今後、会員のみなさまには新たな負担をお願いすることになるかもしれません。もう一つの懸念事項は大会の開催です。大会は会員の研究発表の場であると同時に会員間の交流の場でもあります。本学会の大会には若い研究者の活発な研究発表が多く、対面での開催は学会の活性化にはかかせません。これはコロナ禍でも痛感したことです。しかし、これまでのように大学に会場を求めることは経費的にも受入側にも負担が大きくなり、大会の開催方法についても検討が必要ではないかと考えています。

2年間の任期となりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

新評議員あいさつ

評議員 池田 博、片桐 知之、志賀 隆、首藤 光太郎、副島 顕子、西田 佐知子、西野 貴子、ニッタ ジョエル、藤井 伸二、細矢 剛、松崎 令、米倉 浩司

2025年1月から2年間、この12名のメンバーが日本植物分類学会の評議員を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

評議員は、会長の諮問に応じて学会運営の重要事項を評議員会で審議します。総会で会員の皆様に諮られる議題は、評議員会での議論を基にしています。評議員会では、会長および執行部が提案する議案が議論の末に否決されたり、内容が修正されることもあります。また、評議員から新たな課題が執行部に対して提示されることもあります。植物分類学の研究の進展と知識の普及を図るため、学会のさまざまな活動について議論を進めてまいります。日頃の学会活動に関して、ご意見・ご要望がございましたら、些細なことでも構いませんので、ぜひお近くの評議員までお知らせください。

新役員等一覧 (任期：2025年1月1日～2026年12月31日)

庶務幹事 高野 温子

今期の役員、および各委員長と委員を下にご報告いたします。

会長	永益 英敏	
庶務幹事*	高野 温子	
会計幹事*	永濱 藍	
図書幹事*	李 忠建	
ニュースレター担当幹事*	大槻 達郎	
ホームページ担当幹事*	佐藤 博俊	
編集委員長	布施 静香	
英文誌編集長	布施 静香	
和文誌編集長	厚井 聡	
日本分類学会連合担当委員	岩崎 貴也	
自然史学会連合担当委員	朝川 毅守	
講演会担当委員	横川 昌史	
野外研修会担当委員	根本 秀一	*会則第11条で定める幹事(連続二期まで)

評議員：池田 博，片桐 知之，志賀 隆，首藤 光太郎，副島 顕子，西田 佐知子，西野 貴子，
ニッタ ジョエル，藤井 伸二，細矢 剛，松崎 令，米倉 浩司(五十音順)

監事：池谷 佑幸，大村 嘉人(2025年度の総会まで)

委員会

編集委員会：布施 静香(編集委員長)，厚井 聡(和文誌編集長)，池田 啓，池田 博，井上 侑哉，
岩崎 貴也，海老原 淳，大村 嘉人，川窪 伸光，黒沢 高秀，高山 浩司，田金 秀一郎，
田中 伸幸，田村 実，内貴 章世，仲田 崇志，永益 英敏，西田 佐知子，西田 治文，
ニッタ ジョエル，藤井 伸二，藤井 紀行，牧 雅之，村上 哲明，米倉 浩司，綿野 泰行，
David E. Boufford (アメリカ)，Jae-Hong Pak (韓国)，Rachun Pooma (タイ)，Yong-Ping Yang (中国)

絶滅危惧植物専門第一委員会：藤井 伸二(委員長)，東 隆行，海老原 淳，勝山 輝男，加藤 英寿，
角野 康郎，黒沢 高秀，志賀 隆，末次 健司，高宮 正之，藤田 卓，
矢原 徹一，横田 昌嗣，米倉 浩司

絶滅危惧植物専門第二委員会：細矢 剛(委員長)，有川 智己，大村 嘉人，糟谷 大河，柏谷 博之，
神谷 充伸，片桐 知之，菊地 則雄，北山 太樹，坂山 英俊，竹下 俊治，
寺田 竜太，服部 力，樋口 正信，吹春 俊光，古木 達郎，保坂 健太郎，
宮脇 博巳，山口 富美夫

植物データベース専門委員会：大西 亘(委員長)，伊藤 元己，海老原 淳，永益 英敏，藤井 伸二，
米倉 浩司

学会賞選考委員会：梶田 忠(委員長)

ABS 問題対応委員会：村上 哲明（委員長），海老原 淳，菅原 弘貴，田金 秀一郎，坪田 博美，
遠山 弘法，藤井 伸二，藤原 泰央

国際シンポジウム準備委員会：池田 博（委員長）

標本問題対応委員会：田中 伸幸（委員長），池田 博，片桐 知之，田金 秀一郎，細矢 剛，永益 英敏，
遊川 知久

国際命名規約翻訳委員会：永益 英敏（委員長）

研究・普及推進委員会：黒沢 高秀（委員長），海老原 淳，大西 亘，角野 康郎，志賀 隆，
首藤 光太郎，末次 健司，田金 秀一郎，根本 秀一，早川 宗志，藤井 伸二，
横川 昌史

諸報告

2025 年度第 24 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 梶田 忠

推薦人からお寄せいただいた候補者の研究概要や業績リスト等の資料をもとに，選考委員会にて選考を進めました。その結果，学会賞受賞者 2 名，奨励賞受賞者 2 名が選ばれました。受賞者のお名前と選考の理由を以下に報告します（敬称略。各賞それぞれ五十音順）。

学会賞：伊藤 元己「分子情報を利用した植物の系統進化・種分化研究」

植物分類学に分子情報を取り入れた研究を日本でいち早く推進し，植物分子系統学や種分化研究の草分け的存在として，数多くの優れた研究成果を上げられました。研究活動の幅は極めて広く，小笠原の固有植物やキク科植物の研究，形態学や解剖学，バイオインフォマティクス，生物多様性情報学，保全生物学等の多岐にわたるアプローチで，統合的な学問分野としての植物分類学の位置づけを確たるものとされました。さらに，研究室の内外で多くの学生・研究者を指導され，若手研究者の育成に尽力されました。影響を受けた研究者の多くが，現在の日本の植物分類学を支える存在となっています。これら，植物分類学の発展における卓越した功績と，会長，評議員や各種委員を歴任した植物分類学会への特に顕著な貢献が，高く評価されました。

学会賞：木下 覺「徳島県の地域フロラ調査と希少植物の保全」

徳島県植物誌研究会会長や阿波学会副会長を歴任されるなど，徳島県並びに四国の植物分類研究を責任ある立場で牽引されてきました。また，精力的な現地調査にもとづく数々の発見は，徳島県や周辺地域の植物相を解明する上での礎となり，多くの発見がプロ研究者との共同研究論文として発表されています。また，ご自身が中心となって発表された報告も多数あります。さらに，徳島県における希少種の保護や保全，外来種の防除などについて，国や地方行政が行う取り組みに精力的に貢献されてきました。これら，非職業研究者としての素晴らしい活動が，植物分類学と分類学会への特に顕著な貢献であると高く評価されました。

奨励賞：伊東 拓朗「マンネングサ属における系統分類学および進化生物学的研究」

マンネングサ属に着目して，フィールドワーク，記載分類，系統分類，系統地理，進化生物学的研究を精力的に推進してこられました。植物分類学研究者としての，基礎から応用までを含む広汎な技術と見識に裏付けられた研究の数々は，日本の植物分類学の将来的な発展を期待させるものとして，高く評価されました。また，数多くの学生を指導し，

多くの研究者との共著論文を発表してこられました。今後も日本の植物分類学の発展に向けて、質の高い研究を続け、多くの後進を育成して下さることが期待されます。

奨励賞： 鄭 天雄「ゼニゴケ綱を中心としたタイ類の系統分類と多様性研究」

ゼニゴケ綱の分類学的研究を精力的に実施し、非常に多くの研究論文を発表されました。また、未解決の問題点を多く含むゼニゴケ科を中心に、綿密なフィールドワークと標本調査、分子系統学的解析により、分類学的な諸問題を包括的に解決されたことが高く評価されました。ゼニゴケ綱はモデル植物であるゼニゴケを含むことから、整理された分類体系や系統関係は、植物学や進化発生学などの幅広い分野で活用される可能性があります。また、近年、APGに発表された研究業績の数々から、今後もコケ植物の分類学者として活躍されることが期待されます。

2025 年度第 19 回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 布施 静香

2025 年度第 19 回日本植物分類学会論文賞は、2024 年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』75 巻および和文誌『植物地理・分類研究』72 巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文 8 編を論文賞選考委員会において審査し、次の 2 論文に決定しました。

Lee, C.-K., S. Fuse, M. Poopath, R. Pooma, S. Tagane, Y.-P. Yang, H. Tobe & M. N. Tamura. 2024. Biosystematic studies on Commelinaceae (Commelinales) II. Phylogeny and floral evolution in *Murdannia*. Acta Phytotax. Geobot. 75(2): 51–69.

選考理由：本論文は、ツユクサ科イボクサ属の左右相称花がツユクサ科の他属の左右相称花とは構造的に異なり、鏡映面が 60 度ずれていることを明らかにし、本属が独自の左右相称花を進化させたことを示した。本研究は、解剖学的手法と分子系統学的手法の両方の利点を活かしており、特に花や花序の様々なステージの切片を丁寧に作製し慎重に比較検討していることなど、重厚な解剖学的データに裏打ちされた質の高い研究であると評価された。そして、形態学・解剖学のおもしろさや植物系統分類学的アプローチの多様さを再認識させられた点においても評価された。

Masuda, R., H. Noda, K. Shintaku, N. S. Lee, S. Fuse & M. N. Tamura. 2024. Biosystematic studies on the genus *Polygonatum* (Asparagaceae) VI. *Polygonatum ×hizenense* and *P. ×sefuriense*, two new hybrids from Japan. Acta Phytotax. Geobot. 75(2): 97–111.

選考理由：本論文は、クサスギカズラ科アマドコロ属の未知の植物について、形態、染色体、花粉稔性、ゲノムワイド SNPs 解析など多様な手法を駆使し、雑種であることを明らかにしたものである。また、本論文では 2 雑種の詳細な図が掲載されており、アマドコロ属全体における雑種のレビューもなされていて、染色体基本数 $x = 11$ の種が親となった雑種の初報告であることも示された。研究目的に沿って多角的なアプローチを取り、慎重かつ緻密に研究を進めた姿勢と、研究の質の高さが評価された。

2025 年度第 1 回メール評議員会 議事抄録

庶務幹事 高野 温子

2025 年 1 月 27 日から 2 月 7 日にかけて、2024 年度第 1 回メール評議員会、および2025年度第1回メール評議員会が合同で開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は 2024 年度の事業報告案と会計決算案を 2023 - 2024年度評議員の方に、2025年度事業計画案および会計予算案を 2025 - 2026 年度評議員の方に審議していただくものです。

開催日時：2025 年 1 月 27 日～ 2 月 7 日開催方法：電子メール媒体を用いた会議

参加者：2023 - 2024 年度評議員，および 2025 - 2026 年度 評議員全員

議長選出：慣例に従い、村上哲明前会長を第 1 号議案の議長，永益英敏会長を第2号議案の議長とすることに反対はなかった。

1. 審議事項

第 1 号議案 2024 年度 事業報告案・決算案

第 2 号議案 2025 年度 事業計画案・予算案

以上の議案は、2025 年度総会議案と重複するため、掲載を省略させていただきます。総会議案 (10-16 ページ) をご参照ください。

2. 審議結果

第 1 号議案は、修正の後、承認多数で可決された。

【賛成 13 票, 反対 0 票, 白票 0 票】

第 2 号議案については、修正を経て承認多数で可決された。また、委任状はなかったが、白票扱いがあった。

【賛成 11 票, 反対 0 票, 白票 2 票】

3. 議事録署名人

議事録署名人として 藤井伸二 氏と 志賀 隆 氏が選出された。

2024 年度日本植物分類学会講演会の報告

2024 年度講演会担当委員 高山 浩司

24 回目の日本植物分類学会講演会が、2024 年 12 月 14 日（土）に大阪学院大学ならびに Zoom を用いたオンラインで開催されました。開催に関する情報は、学会メーリングリスト、ホームページ、ニュースレターおよび TAXA・EVOLVE 等のメーリングリストによって行われ、合計 252 名の事前申込がありました。当日は会場参加者が 73 名、Zoom の同時接続者が常に 120 名前後と、全国の多くの方々にご参加いただきました。開催当日も大阪学院大学の事務職員や IT 技術者の方に全面的な協力を頂き、無事にハイブリッド形式で講演会が行われました。また、懇親会にも 32 名の方にご参加いただき、素晴らしい交流の機会となりました。

今回は 6 名の先生方に下記の順でご講演いただきました。

横川 昌史（大阪市立自然史博物館）「さく葉標本から見た大阪湾沿岸の海浜植生の今昔」

樋口 裕美子（京大大学生態学研究センター）「葉の形状にまつわる生物間相互作用」

西村 明洋（神戸大学）「小笠原諸島固有の寄生植物シマウツボにおける生態と進化」

井上 侑哉（国立科学博物館）「センボンゴケ科を中心としたコケ植物の種多様性研究」

森 和男（東アジア野生植物研究会）「山の中でキレイな花と出会う」

布施 静香（京都大学）「東アジア・東南アジアで単子葉植物を探す」

日本植物分類学会講演会に参加して

平井 鈴音菜（京都大学大学院理学研究科）

本講演会では、自身の知見を深める非常に有意義な話を拝聴することができました。

横川先生は、昔のさく葉標本と現状から分析された大阪湾沿岸の海浜植物の変化と、標本データの在り方における変遷についてお話くださいました。海岸開発の前後で比較した大阪湾での海浜植物の分布を拝見し、その激減ぶりに衝撃を受けました。変更前の植生や環境を過去の植物標本から読み解く工程は、当時にタイムスリップしてフィールド調査を行っているような感覚で大変興味深く感じたと同時に、絶滅危惧植物の保全に繋がる重要な取り組みであると学ぶことができました。また、標本データの蓄積は多くの採集者の小さな積み重ねによる賜物であると知り、研究で標本から貴重な情報を得られることへのありがたみがより一層深まりました。

樋口先生からは、ハクサンカメバヒキオコシの葉の形状やカタクリの斑入り葉がもたらす他生物への影響についてご講演いただきました。ハクサンカメバヒキオコシは、他の同属では見られない切れ込んだ葉を持つことで、ムシモンオトシブミによる揺籃形成を早期に抑止していることを学びました。他方のカタクリは、隔離されてから古い一部の島で斑入り葉を持つものが現れることを知りました。植食者による変異の可能性も考え、葉の反射スペクトルとシカの色コントラストの両側面から解析がなされており、面白味のある研究だと感じました。本講演は、植物学研究には動物や菌類といった他生物の生存戦略への理解も必要であると再認識できる機会となりました。

最後に、大変学びの多いご講演をしてくださった先生方、ならびに本講演会の開催にご尽力くださった皆様に心より深く感謝申し上げます。

山口 万里花（東京大学大学院理学系研究科 / 国立科学博物館筑波実験植物園）

今回の講演会には、遠方のためオンラインで参加させていただきました。どのご講演も非常に興味深く、楽しく拝聴いたしました。

西村先生には、小笠原諸島に固有の寄生植物であるシマウツボの寄主転換の歴史や進化過程についてご講演いただきました。小笠原諸島を舞台に、シマウツボの送粉生態や宿主の調査を行い、島間比較や大陸に分布する近縁種ハマウツボとの種間比較を通じて宿主転換のプロセスを推定するという、明快かつ体系的な研究に感銘を受けました。また、種内でも集団間で宿主が異なることや、父島と弟島では宿主が同じであるにもかかわらず集団遺伝構造が異なる点など、研究の進展に伴い意外な発見があり、思わず引き込まれました。

井上先生のご講演では、東・東南アジアにおけるセンボンゴケ科の種多様性とその進化プロセスについてお話いただきました。コケ類の生育環境は非常に多様で、海辺から他の植物の葉の上まで、驚くべき場所にも進出しているというお話に大変興味を引かれました。中でもセンボンゴケ科は、石灰岩地など他の植物が生育できない極限環境への適応により多様化したことから、突然変異率を比較するアプローチは興味深いと思いました。引き続き、センボンゴケ科で分子進化速度を比較していかれるとのことで、今後の進展が楽しみです。

最後に、貴重な講演をいただいた先生方、また開催にあたりご尽力くださいましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

小林 智（京都大学大学院理学研究科）

森先生には、中国の各地の山の *Lilium* や *Primula* などの様々なきれいな花の写真をを見せていただきました。現地で生きた植物を誰よりも観察してきたからこそその美しい写真だと思いました。日本の山にしか登ったことのない私にとっては、どれも見たことのない植物ばかりで、とても心の弾むお話をしました。印象に残っているのは、それぞれの写真ごとに、探した時の様子だけでなく、その植物にまつわるプラントハンターなど歴史上の人物のエピソードをたくさんお聞きできたことです。形は違いますが、標本を見て採集者のことを想像する楽しさと似ているなど感じました。

布施先生には、タイを中心に東南アジア、東アジア各地での単子葉植物の調査の様子を伺いました。タイは地域ごとに気候が大きく異なっていて、それぞれ異なった植生が成立していることに興味を惹かれました。外国での調査は、カウンターパートやレンジャーの方をはじめ、調査隊だけでなく様々な方との関わりの中で成り立っていました。そして写真からはみなさんの楽しそうな様子が伝わってきました。*Curculigo* をはじめ、まだまだ種の実態が分かっていない植物がたくさんいることを知り、自分もいつかこのような未知の植物が豊富な地域にも訪れてみたいと思いました。

どの先生のお話も、興味深く楽しい時間でした。私も先生方を目標により一層精進したいと感じました。ご講演されたみなさま、企画して下さったみなさまに感謝申し上げます。



講演会の集合写真
(撮影者：塚本 佳生)



懇親会の集合写真
(撮影者：塚本 佳生)



図書やカレンダーのチャリティー頒布会
もありました (撮影者：塚本 佳生)

第40回国際生物学賞記念シンポジウムの報告

第40回国際生物学賞記念シンポジウム実行委員会

委員長 田村 実 (京都大・院・理・植物)

第40回国際生物学賞 (https://www.jsps.go.jp/j-biol/03_recipients/40_awardee.html) 記念シンポジウム Commemorative Symposium for the 40th International Prize for Biology は、「系統学と分類学 - 植物・動物・菌類・藻類・微生物を含む多様な生物の世界」"Phylogeny and Taxonomy-World of the diversified organisms including plants, animals, fungi, algae and microbes" というテーマで、2024年12月21日(土) 9:45-18:00に京都大学芝蘭会館で開催されました。対面だけでなく、オンライン参加も可能なハイブリッド形式で、日本語と英語の間の双方向の同時通訳をつけての開催でした。

このシンポジウムは、第40回国際生物学賞受賞者の Angelika Brandt 博士 (ゼンケンベルク研究所・自然史博物館) の深海生物学と甲殻類の講演を皮切りに、午前中に矢後勝也博士 (東京大学) のヒマラヤ生物学と蝶類の講演と田金秀一郎博士 (鹿児島大学) の熱帯生物学と陸上植物の講演があり、世界のさまざまな地域の精力的かつ緻密な生物多様性調査とそれに基づく系統分類学について伺うことができました。午後は分類群ごとの講演が展開され、石田健一郎博士 (筑波大学) の微生物、Juliet Brodie 博士 (ロンドン自然史博物館) の藻類、服部力博士 (森林総合研究所) の菌類と、大学の講義では必要不可欠な分類群の最前線の系統分類学を知ることができました。馬渡駿介博士 (北海道大学) は、名著『動物分類学の論理』(東京大学出版会) の著者で、動物分類学についてわかりやすく解説してくださいました。Mark W. Chase 博士 (キュー王立植物園) は、網状進化した系統の分類体系への落とし込みを含め、来るべき APG V 分類体系について話されました。最後に寺島一郎博士 (国立中興大学) が、他分野 (植物生理生態学) からみた系統分類学の可能性についてお話しされました。いずれも聞きごたえのある講演で、あつという間の8時間15分でした。

主催は京都大学と日本学術振興会でした。実行委員として本シンポジウムを支えてくださった京都大学の布施静香博士、高山浩司博士 (以上理学研究科植物系統分類学研究室)、中野隆文博士、岡本卓博士 (以上理学研究科動物系統学研究室)、朝倉彰博士 (瀬戸臨海実験所) と神戸大学の川井浩史博士には大変感謝致しております。どうも有難うございました。また、後援として日本植物分類学会をはじめ、日本植物学会、日本動物学会、日本菌学会、日本藻類学会、日本甲殻類学会、日本原生生物学会、日本共生生物学会、日本動物分類学会、日本分類学会連合と多くの学会・連合に御協力頂いて、合計429名 (対面115名、オンライン314名) という大変多くの方々に御参加頂くことができ、活発な議論が展開されました。日本植物分類学会からも永益英敏現会長、村上哲明前会長、戸部博元会長をはじめ、多くの会員の方々にご参加頂き、シンポジウムを盛り上げて頂きました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。



第40回国際生物学賞受賞者の Angelika Brandt 博士 (ゼンケンベルク研究所・自然史博物館) のご講演の様子

お知らせ

2025 年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 高野 温子

来たる 3 月 9 日 (日) の総会にて、下記の議案が審議されます。今回の総会は、第 24 回大会会場の高知大学での現地開催となります。ご参加が難しい場合には、電子メール、ファックス、もしくは郵送にて、次の庶務幹事宛てにご意見等を事前にお寄せください。

庶務幹事連絡先 高野 温子

jimu@e-jsps.com, Fax : 079-559-2007 (高野宛をご明記ください)

〒669-1546 三田市弥生が丘 6 丁目 兵庫県立人と自然の博物館

第 1 号議案

2024 年度事業報告 (案)

庶務幹事 高野 温子

(1) 集会等の開催

・ 学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会として、日本植物分類学会 第 23 回大会 (仙台) を 3 月 8 日 (金) ~ 3 月 12 日 (火) に東北大学にて開催した。

2024 年度講演会を 12 月 14 日 (土) に大阪学院大学にての現地、および同時オンライン配信でのハイブリッド方式で開催した。

2024 年度野外研修会は、ミュージアムパーク茨城県自然博物館の鈴木亮輔氏, 伊藤彩乃氏にお世話いただき、9 月 30 日 (月), 10 月 1 日 (火) に茨城県つくば市宝篋山と筑波山周辺, ミュージアムパーク茨城県自然博物館にて開催した。

・ 総会, 評議員会

年次総会を 3 月 11 日 (月) に東北大学片平さくらホールにて開催した (ニュースレター 93 号にて報告)。

評議員会を 1 回, 3 月 8 日 (金) に東北大学植物園にて開催した (ニュースレター 93 号にて報告)。

メール評議員会を 1 回, 1 月に開催した (ニュースレター 92 号にて報告)。

(2) 出版物の刊行

・ 学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 75 巻 1 ~ 3 号 (計 3 冊) を発行した。

和文誌『植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第 72 巻 1 ~ 2 号 (計 2 冊) を発行した。

・ ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』を 92 ~ 95 号 (計 4 号) を発行した。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動を行なった。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS 問題対応委員会
- ・国際命名規約邦訳委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
- ・標本問題対応委員会
- ・研究・普及推進委員会

(4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の受賞者を決定し（ニュースレター 92 号で報告）、授与を行った。
- ・日本植物分類学会論文賞の受賞者を決定し（ニュースレター 92 号で報告）、授与を行った。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の受賞者を決定し（ニュースレター 93 号で報告）、授与を行った。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) と連携した。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』の論文 PDF を J-STAGE で公開した。
- ・第 15 回（2024 年度）日本学術振興会 育志賞への推薦を行った。
- ・第 40 回国際生物学賞記念シンポジウム「系統学と分類学 植物・動物・菌類・藻類・微生物を含む多様な生物の世界」（2024 年 12 月 21 日、京都大学）を後援した（主催：京都大学・日本学術振興会）。

2024年度 一般会計 決算(案) (単位:円) (2024.12.31現在)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異	
会費						
通常(一般)	7,000	731	5,117,000	4,797,000	△ 320,000	注1
通常(学生/海外)	3,000	100	300,000	268,000	△ 32,000	
団体会員	8,000	20	160,000	152,000	△ 8,000	
自動振替手数料		132	18,876	17,028	△ 1,848	
APGカラーチャージ	18,000	32	576,000	468,000	△ 108,000	
バックナンバー販売			40,000	65,500	25,500	
著作権使用料			120,000	110,647	△ 9,353	
利息			50	822	772	
雑収入			0	30,000	30,000	注2
合計			6,331,926	5,908,997	△ 422,929	

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異	
大会補助費			100,000	100,000	0	
講演会補助費			70,000	61,550	△ 8,450	
出版物印刷費						
APG vol. 75(1, 2, 3)	960,000	3	2,880,000	2,691,827	△ 188,173	
植物地理・分類研究 vol. 72 (1, 2)	720,000	2	1,440,000	1,447,710	7,710	注3
ニュースレター No. 92~95	55,000	4	220,000	207,900	△ 12,100	
学会誌編集補助費			280,000	254,268	△ 25,732	
英文校閲費			50,000	50,000	0	
出版物送料						
APG送料	110,000	3	330,000	309,865	△ 20,135	注4
和文誌送料	110,000	2	220,000	202,489	△ 17,511	注4
NL送料	90,000	2	180,000	130,407	△ 49,593	注4
会議費			0	0	0	
学会賞表彰経費			97,000	53,102	△ 43,898	注5
自然史学会連合分担金			20,000	20,000	0	
分類学会連合分担金			10,000	10,000	0	
事務局管理費						
消耗品費			20,000	0	△ 20,000	
交通費			0	2,340	2,340	
封筒等印刷費			300,000	122,980	△ 177,020	注6
通信費(小包手数料を含む)			50,000	54,190	4,190	
手数料・その他			15,000	5,445	△ 9,555	
集金代行基本料金/資金振込手数料			5,762	5,654	△ 108	
集金代行振替手数料	132	143	18,876	15,840	△ 3,036	
レンタルサーバー使用料			28,050	31,520	3,470	注7
国際シンポジウム積立金			100,000	100,000	0	
予備費			100,000	83,608	△ 16,392	注8
合計			6,534,688	5,960,695	△ 573,993	

単年度収支	△ 202,762	△ 51,698	151,064
前年度からの繰越金	7,273,381	7,273,381	0
次年度への繰越金	7,070,619	7,221,683	151,064

注1:未納分を多く含むため。

注2:会員(遺族)からの寄附。

注3:印刷代値上げのため。

注4:同時発送が増えたため。

注5:特別会計「顕彰事業」から支出したため。

注6:印刷発注の一部が次年度に持ち越しとなったため。

注7:使用料値上げのため。

注8:選挙名簿を発送したため。

2024年度 特別会計〔絶滅危惧種調査〕 決算(案) (単位:円) (2024.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異	
前年度繰越金	976	976	0	注1
レッドリスト改訂のための原稿費(2024年執行予定)	1,800,000	1,800,000	0	注2
合計	1,800,976	1,800,976	0	
支出の部	予算	決算	予算との差異	
レッドリスト改訂のための事務委託費・原稿編集費	1,800,976	1,800,811	△165	注3
振込手数料	0	165	165	
合計	1,800,976	1,800,976	0	

注1:環境省2022年度事業(分類学会2023年度事業)。

注2:環境省2023年度事業(分類学会2024年度事業)。

注3:分類学会2024年度事業。当初予算では合算していた振込手数料165円を別途記載。

2024年度 特別会計〔国際シンポジウム〕 決算(案) (単位:円) (2024.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異	
前年度繰越金	941,072	941,072	0	注1
国際シンポジウム積立金	100,000	100,000	0	
合計	1,041,072	1,041,072	0	
支出の部	予算	決算	予算との差異	
国際シンポジウム準備金	0	0	0	
国際シンポジウム若手派遣	0	0	0	
次年度への繰越金	1,041,072	1,041,072	0	
合計	1,041,072	1,041,072	0	

注1:2029年の開催に備えての積立金。一般会計より移換

2024年度 特別会計〔命名規約〕 決算(案) (単位:円) (2024.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異	
前年度繰越金	617,609	617,609	0	
合計	617,609	617,609	0	
支出の部	予算	決算	予算との差異	
次年度への繰越金	617,609	617,609	0	注1
合計	617,609	617,609	0	

注1:該当する支出がなかったため。

2024年度 特別会計〔顕彰事業〕 決算(案) (単位:円) (2024.12.31現在)

収入の部	予算	決算	予算との差異	
前年度繰越金	385,924	385,924	0	
一般会計より移換	0	0	0	
合計	385,924	385,924	0	
支出の部	予算	決算	予算との差異	
発表賞関連消耗品	0	92,400	92,400	注1
次年度への繰越金	385,924	293,524	△92,400	
合計	385,924	385,924	0	

注1:学会賞等授与を顕彰事業と認めて支出した。

第2号議案 2025年度事業計画（案）

庶務幹事 高野 温子

(1) 集会等の開催

- ・ 学術集会, 講演会, 研修会
年次学術集会（日本植物分類学会 第24回大会：3月7日（金）～3月10日（月），高知）を開催する。
2025年度講演会を開催する。
2025年度野外研修会を開催する。
- ・ 学術集会総会, 評議員会
評議員会を開催する（3月7日）。
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3月9日）。

(2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第76巻1～3号（計3冊）を発行した。
和文誌『植物地理・分類研究（The Journal of Phytogeography and Taxonomy）』第73巻1～2号（計2冊）を発行する。
- ・ ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』を96～99号（計4号）を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し, 目的に沿って活動する。

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会
- ・ 論文賞選考委員会
- ・ 大会発表賞選考委員会
- ・ ABS 問題対応委員会
- ・ 国際命名規約邦訳委員会
- ・ 国際シンポジウム準備委員会
- ・ 標本問題対応委員会
- ・ 研究・普及推進委員会

(4) 表彰

- ・ 日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議, 自然史学会連合, 日本分類学会連合など。
- ・ The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携, 協力を行う。

(6) その他

- ・ 学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・ 当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究（The Journal of Phytogeography and Taxonomy）』の論文 PDF を J-STAGE で公開する。
- ・ 植物分類学関連情報（学術集会, 研究動向, 出版物, 公募）を収集し, ニュースレター, ホームページ,

メールニュース等で提供する。

- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。

2025年度 一般会計 予算(案) (単位:円)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常(一般)	7,000	710	4,970,000	△ 147,000	注1
通常(学生/海外)	3,000	100	300,000	0	
団体会員	8,000	21	168,000	8,000	
自動振替手数料	132	134	17,688	△ 1,188	
APGカラーチャージ	18,000	30	540,000	△ 36,000	
バックナンバー販売			65,000	25,000	
著作権使用料			110,000	△ 10,000	
利息			50	0	
雑収入			0	0	
合計			6,170,738	△ 161,188	
支出の部					
大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費				0	
APG vol.1.76(1,2,3)	960,000	3	2,880,000	0	
植物地理・分類研究 vol.1.73(1,2)	720,000	2	1,440,000	0	
ニュースレター No.96~99	55,000	4	220,000	0	
学会誌編集補助費			280,000	0	
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料					
APG送料	110,000	3	330,000	0	
和文誌送料	110,000	2	220,000	0	
NL送料	90,000	2	180,000	0	注2
会議費			0	0	
学会表彰経費			97,000	0	
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合分担金			10,000	0	
事務局管理費					
消耗品費			10,000	△ 10,000	
交通費			0	0	
封筒等印刷費			470,000	170,000	注3
通信費(小包手数料を含む)			50,000	0	
手数料・その他			10,000	△ 5,000	
集金代行基本料金/資金振込手数料			5,762	0	
集金代行振替手数料	132	134	17,688	△ 1,188	
レンタルサーバー使用料			32,000	3,950	注4
国際シンポジウム積立金			200,000	100,000	注5
予備費			100,000	0	
合計			6,792,450	257,762	
単年度収支			△ 621,712	△ 418,950	
前年度からの繰越金			7,221,683	△ 51,698	
次年度への繰越金			6,599,971	△ 470,648	

注1:会員数変動のため。

注2:学会誌との同時発送を年2回行う。

注3:前年度からの持越し分を総額したため。

注4:使用料値上げのため。

注5:2029年の開催に備えての積立金。特別会計へ移換。

2025年度 特別会計 [絶滅危惧種調査] 予算 (案) (単位: 円)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	0	△ 976	
レッドリスト改訂のための原稿費	0	0	
合計	0	△ 976	注1

支出の部	予算	前年度予算との差異	
レッドリスト改訂のための事務委託費・原稿編集費	0	△ 1,800,976	
次年度への繰越金	0	0	
合計	0	△ 1,800,976	注2

注1: 該当する収入がないため。

注2: 該当する支出がないため。

2025年度 特別会計 [国際シンポジウム] 予算 (案) (単位: 円)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	1,041,072	100,000	
国際シンポジウム積立金	200,000	100,000	
合計	1,241,072	200,000	注1

支出の部	予算	前年度予算との差異	
国際シンポジウム準備金	0	0	
国際シンポジウム若手派遣	100,000	0	
次年度への繰越金	1,141,072	100,000	
合計	1,241,072	100,000	注2

注1: 2029年の開催に備えての積立金。一般会計より移換。

注2: 中国で開催される予定。

2025年度 特別会計 [命名規約] 予算 (案) (単位: 円)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	617,609	0	
合計	617,609	0	

支出の部	予算	前年度予算との差異	
次年度への繰越金	617,609	0	
合計	617,609	0	注1

注1: 該当する支出がないため。

2025年度 特別会計 [顕彰事業] 予算 (案) (単位: 円)

収入の部	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	293,524	△92,400	
合計	293,524	0	

支出の部	予算	前年度予算との差異	
次年度への繰越金	293,524	△92,400	
合計	293,524	0	注1

注1: 該当する支出がないため。

日本植物分類学会第24回高知大会実行委員会からのお知らせ

大会会長 川原 信夫, 実行委員長 藤川 和美

皆さまには、多数の参加申し込みをいただき、誠にありがとうございます。大会参加には233名、懇親会には168名、発表では口頭発表45件、ポスター発表86件のお申し込みがありました(1月31日現在)。発表者の皆さまには、プログラムや発表方法等を大会HPにてご確認いただき、円滑なプログラム進行にご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。以下、詳細が決定しましたのでお知らせいたします。

●公開シンポジウム「みんなで調べる地域の植物 植物誌編纂を目指して」

第24回高知大会では、下記の通り公開シンポジウムを開催いたします。

【日時】2025年3月8日(土)9:30~12:00 受付9:00~

【場所】高知大学朝倉キャンパス共通教育棟二号館

※会場へのアクセスは公共交通機関をご利用ください。

【内容】全国各地で専門家と地域市民が一体となった、郷土の自然を知り、守り、育む活動が続けられ、その成果の一つとして「植物誌」が出版されています。本シンポジウムでは、地域植物誌のトップランナーでありつづける神奈川県植物誌、多岐にわたる膨大なデータをまとめて出版された岐阜県植物誌、45年間の成果を集大成した宮城県植物誌、新たに改訂に挑もうとしている高知県植物誌で、中心的な役割を担ってきた演者をお迎えし、市民参加型の活動手法や植物誌の成果、またこれからの地域植物誌の課題など具体的な事例を紹介いただきます。

9:30~9:35 開会の挨拶・公開シンポジウム趣旨説明

9:35~10:05 田中徳久氏(神奈川県立生命の星・地球博物館)「県民の県民による県民のための『神奈川県植物誌』

10:05~10:35 須山知香氏(岐阜大学教育学部)「思いやりと譲り合い、そして信念の賜物『岐阜県植物誌』

10:35~11:05 上野雄規氏(宮城植物の会)「宮城県植物誌(2017)をスタートラインにして」

11:05~11:35 鴻上泰氏(土佐植物研究会)「高知県植物誌の改訂を目指して」

11:35~11:55 総合討論

11:55~12:00 閉会の挨拶

●ランチョンセミナー「標本室の今とこれから」

本大会では、3月9日(日)12:15~13:15に、植物分類学ならではのトピックス「標本室ハーバリウム」について、県立博物館と大学の標本室ではどんな取り組みをしているのかをご紹介します。ランチョンセミナーを開催します。

12:15~12:35 高野温子氏(兵庫県立大学・人と自然の博物館)「兵庫県立人と自然の博物館の標本保存と活用の取り組みについて」

12:35~12:55 ジェーゴ・タヴァレス・ヴァスケス氏(東京大学・理学系研究科附属植物園)「東京大学植物標本室が進めているプロジェクトと今後の課題」

12:55~13:15 黒沢高秀氏(福島大学共生システム理工学類)「地方の小さな新しい植物標本室の管理・運営・活用 福島大学FKSEの挑戦」

※参加ご希望の方は、各自お弁当をご持参ください。なお、大会参加のお申し込みをいただいた方を対象としたセミナーです。ご了承ください。

標本チーム、標本レスキューチーム、命名規約・タイプチームの発足

研究・普及推進委員会 黒沢 高秀

研究・普及推進委員会は植物分類学の研究の推進、一般への普及、地域植物研究会の問題・課題や連携に取り組む委員会です。これまで、他学会の植物標本庫見学ツアーへの協力や、各委員が命名法やタイプに関わる研究相談や問い合わせへの対応、学校標本の状況調査・収集・研究、地方の植物研究の支援や地域の研究者との連携などに取り組んできました。各委員が行っている活動を整理し、委員会全体としての活動を標本、標本レスキュー、命名・タイプに分け、それぞれにチームを作り対応することにしました。以下のようにチームが発足し、活動を始める予定です。

標本チーム：標本寄贈支援、学校標本の保全や研究の推進、標本活用に関する研究の推進、標本室利用の普及・啓発など。

黒沢高秀（世話役）、海老原淳、志賀隆、首藤光太郎、田金秀一郎、根本秀一、早川宗志、横川昌史
標本レスキューチーム：レスキュー体制の確立、標本室の安全対策支援、レスキューの支援。

海老原淳（世話役）、黒沢高秀、志賀隆、首藤光太郎

命名・タイプチーム：命名規約やタイプに関する相談対応、普及や啓発。

黒沢高秀（世話役）、海老原淳、大西亘、首藤光太郎、田金秀一郎

委員会全体として、以下のような活動も継続していきます。

- ・学会活動への協力。野外研修会への協力、ニュースレターへの寄稿、レッドリスト調査への協力など。
- ・関連研究会・同好会との連携。地方同好会メーリングリストの立ち上げや運営、研究者と地域の研究者との橋渡し、地域の植物研究の推進など。

書評

Natural History—Development in Japan and Its Future

岩槻邦男 著 引原忠夫 訳 発行 京都通信社 装丁 中曽根デザイン

A5判 371ページ 価格 ¥8,800 (本体 ¥8,000)

発行年月日：2024/10 ISBN 978-4-903473-11-6

長谷部 光泰（基礎生物学研究所生物進化研究部門）

岩槻邦男著「ナチュラルヒストリー」（東京大学出版会）の英訳、Natural History—Development in Japan and Its Future が京都通信社から出版された。原本は2018年に25年間続いたナチュラルヒストリーシリーズの最終巻として出版され、

ナチュラルヒストリーという概念の歴史、ナチュラルヒストリーの科学研究や科学行政、社会との関係などを材料として、「生きているとはどういうことか」という根源的問題に人はどう立ち向かっていくかについて、筆者独自の思索を展開した哲学書である（と私は思っている）。歴史や文化が異なる国の間において、自然科学論文のような形式知を共有することは容易いが、思索や哲学のような暗黙知に大きく依存した内容を正しく共有することは難しい。筆者も、英語版のあとがきにあたる Postscript to the English Version で kyousei, satoyama, mottainai を例にあげながら、日本における shizen に対するナチュラルヒストリー観について理解を深めようとしている。日本人の自然観についてはこれまで多くの論文があるが、ナチュラルヒストリーと生涯にわたって関わってきた筆者による論説は、日本のナチュラルヒストリー史を考える上で、欠くことのできない資料だと思う。日本語だとさらっと読んでいた部分も、英語として、外国人的な視点で読み進めると、日本の独自性が浮き上がってきて面白かった。そして、改めて、本書の内容を反芻することにより、「研究教育職員」ではなく、「学者」の生き方について深く考え、今後の人生に影響を与えてくれた一冊であった。



